

## 雌阿寒岳の火山活動解説資料（令和8年2月）

札幌管区气象台  
地域火山監視・警報センター

3月8日（期間外）にポンマチネシリ96-1火口でごく小規模な噴火が発生しました。

ポンマチネシリ火口付近では、2025年9月12日から観測されている火口方向が上がる傾斜変動が緩やかに続いており、火口付近浅部は引き続き膨張した状態と考えられます。また、96-1火口の噴煙活動は引き続き活発です。火山活動の高まった状態が続いており、ポンマチネシリ火口から約500mの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

ポンマチネシリ火口から約500mの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和7年9月15日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2：火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

## ○活動概況

- ・噴気など表面現象の状況（図2、図3、図4-①、図9、図11-①②⑤、図12-①③、図14-①～⑥）

3月8日09時15分頃から16時頃にかけて、ポンマチネシリ96-1火口でごく小規模な噴火が発生し、灰白色の噴煙が最高で火口縁上約200mまで上がりました。この噴火による大きな噴石の飛散は確認されませんでした。雌阿寒岳の噴火は、2025年10月25日に発生したごく小規模な噴火以来です。また、<sup>かみてしべつ</sup>上徹別監視カメラでは、この噴火の発生前から96-1火口周辺の雪面に火山灰と考えられる噴出物の付着が認められました。6日午後以降、気象条件の影響により火口付近の状況は不明でしたが、6日夜に96-1火口近傍のポンマチ南観測点で火山活動に起因すると考えられるわずかな振幅レベルの増減が認められていたことから、6日夜頃から8日朝の間にもごく小規模な噴火が発生していた可能性が考えられます。

ポンマチネシリ96-1火口では、2025年9月12日以降、噴煙の量の増加した状態が続いています。今期間の噴煙の高さは火口縁上400m以下で経過し、引き続き活発な状態です。

その他の各火口の噴気の高さ（いずれも火口縁上の高さ）は、赤沼火口では100m以下、北西斜面06噴気孔列では100m未満、中マチネシリ火口では200m以下で経過し、噴気活動は低調な状態です。

- ・火山ガスの状況

18日に雌阿寒岳山麓で実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり300トンでした。噴火が発生した2025年9月以降、ポンマチネシリ96-1火口では活発な噴煙活動が続いており、同程度の火山ガス（二酸化硫黄）の放出が続いていると考えられます。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』、『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年3月分）は令和8年4月8日に発表する予定です。

・ **ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図12-②④）**

全磁力連続観測では、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙が増加した2025年9月12日以降、96-1火口付近の地下の熱活動の高まりを示唆する全磁力値の減少がみられ、その後も緩やかな減少傾向が続いています。

・ **地震及び微動の発生状況（図4-③④、図5～10、図11-④⑦、図14-⑦⑧）**

ポンマチネシリ火口付近の火山性地震は、2025年9月中旬に増加したのち、10月頃以降は概ね少なく経過していますが、増加前と比べてやや活発です。

震源はポンマチネシリ火口付近のごく浅い所～深さ0 km付近、中マチネシリ火口付近の深さ1 km付近に分布しました。

27日及び3月1日及び6日（期間外）に振幅が小さい火山性微動を観測しました。このうち、3月1日21時11分頃からの微動は約5分間継続し、ポンマチネシリ火口付近の地震が一時的にやや増加しました。

・ **地殻変動の状況（図4-②、図6、図8、図11-③⑥⑧、図13、図15）**

ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2観測点では、27日及び3月1日及び6日（期間外）に発生した火山性微動と同時期あるいは直後にわずかな傾斜変動が観測されました。阿寒富士北2観測点では、2025年9月12日の火山性微動に伴いポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が観測され、以降もゆるやかに変動が継続しており、ポンマチネシリ火口浅部は引き続き膨張した状態と考えられます。

GNSS連続観測によると、おもに東側山麓の観測点で2025年8月末頃から山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長が観測されています。

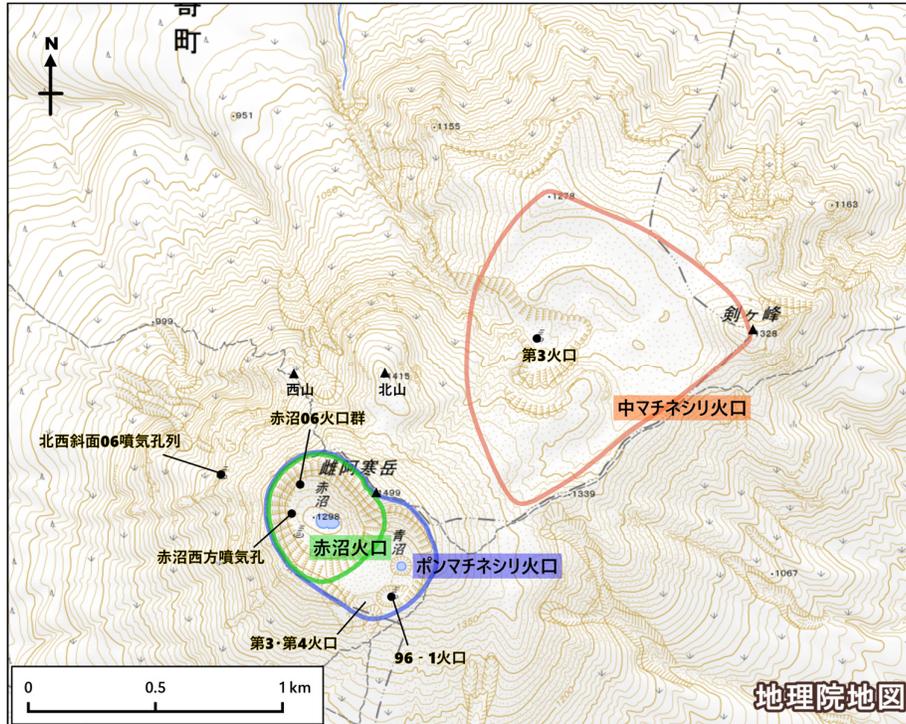


図1 雌阿寒岳 火口及び噴気孔の位置図

各火口の火口縁は、概ねの範囲を示すものです。

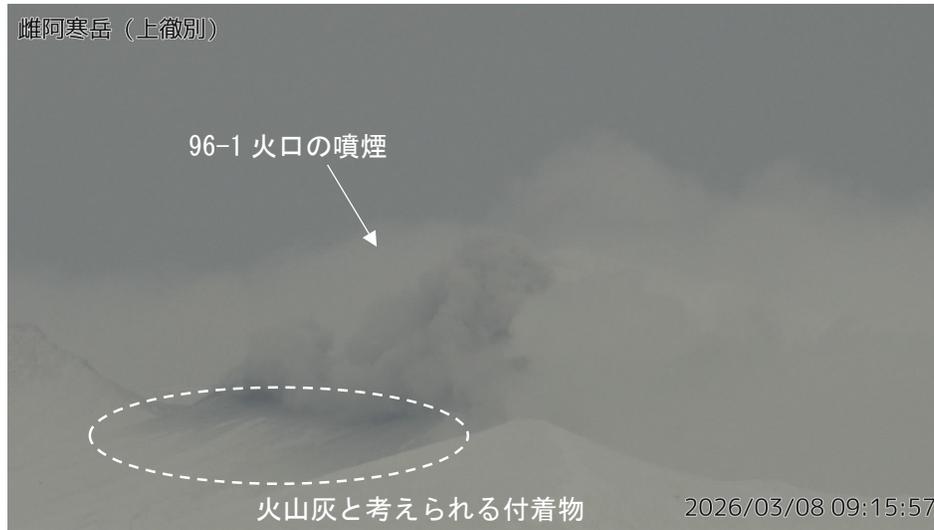


図2 雌阿寒岳 ポンマチネシリ 96-1 火口のごく小規模な噴火の状況（かみてしべつ上徹別監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側））

- ・ 3月8日09時15分頃から、ポンマチネシリ 96-1 火口でごく小規模な噴火が発生し、灰白色の噴煙が最高で火口縁上の高さ約200mまで上がりました。噴火は16時頃まで継続しました。
- ・ この噴火の発生前から、ポンマチネシリ 96-1 火口周辺の雪面に火山灰と考えられる付着物（白破線内）が認められていました。



図3 雌阿寒岳 各火口、噴気孔の噴気（噴煙）の状況

- かみてしべつ左：上徹別監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側から）  
 右：オンネトー展望台（道）監視カメラによる（雌阿寒岳の西側から）
- ・ 96-1火口の噴煙は、2025年9月12日以降増加し、その後も活発な状態が続いています。

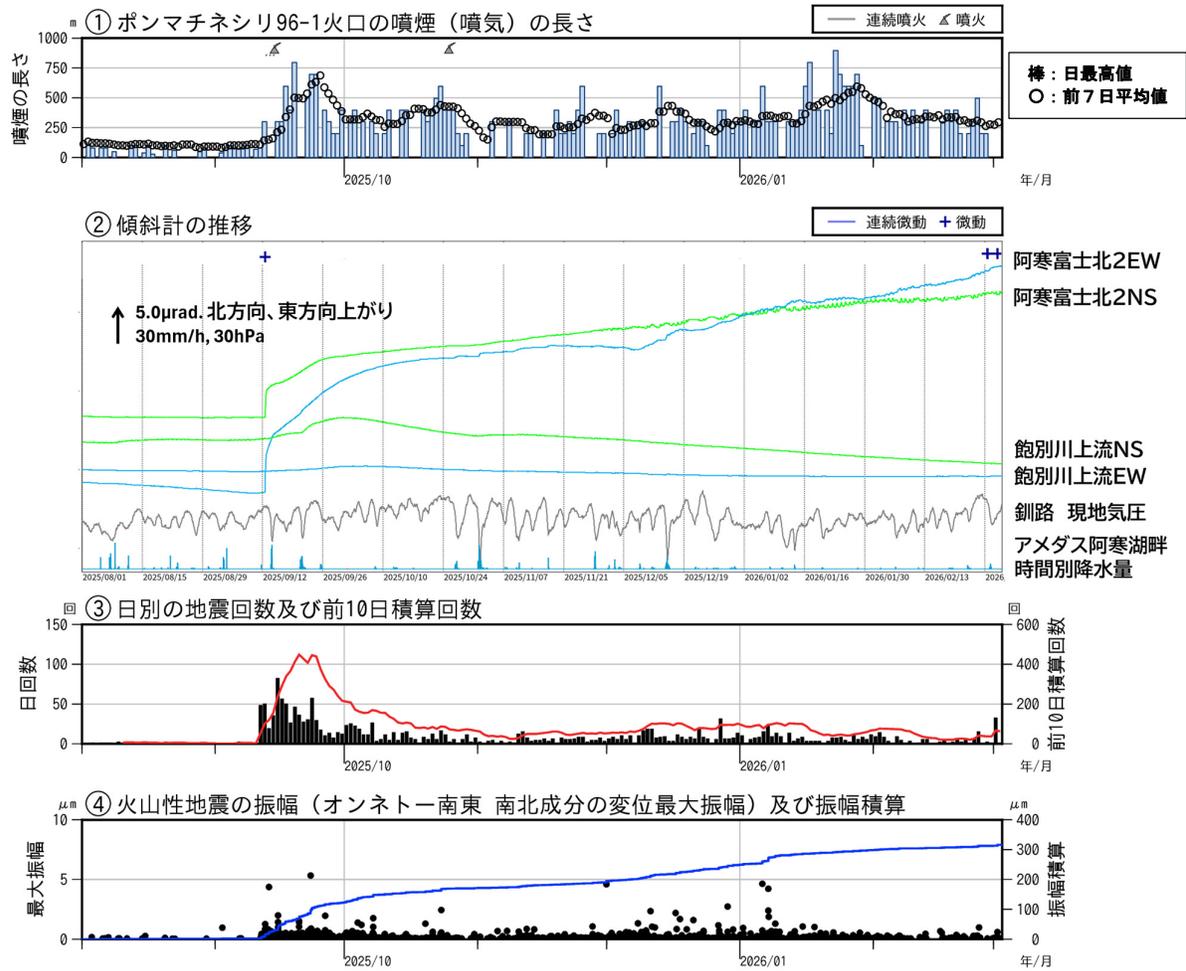


図4 雌阿寒岳 傾斜変動の推移及び火山性地震の発生状況（2025年8月～2026年3月2日）

- ・①の噴気の長さについては図12の説明図を参照ください。
- ・②の傾斜計データは降水や気圧変動の影響と考えられる変動が含まれています。
- ・2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・期間内に発生した火山性地震はポンマチネシリ火口付近の浅部で発生したものが多数を占めています（図10参照）。
- ・2025年9月12日の火山性微動に伴い主に阿寒富士北2観測点でポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が観測され、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙活動が活発化しました。
- ・10月頃以降も緩やかな火口方向上がりの傾斜変動や活発な噴煙活動が継続しています。また、2025年12月上旬から、阿寒富士北2観測点の傾斜計の変動方向にわずかな変化がみられています。
- ・地震活動は、2025年10月頃以降は概ね少なく経過していますが、2025年9月の活発化前と比べてやや活発な状態が続いています。
- ・27日及び3月1日（期間外）に振幅の小さな火山性微動が発生しました。これらの微動と概ね同時期に阿寒富士北2観測点ではわずかな傾斜変動が認められました（図4～8を参照）。

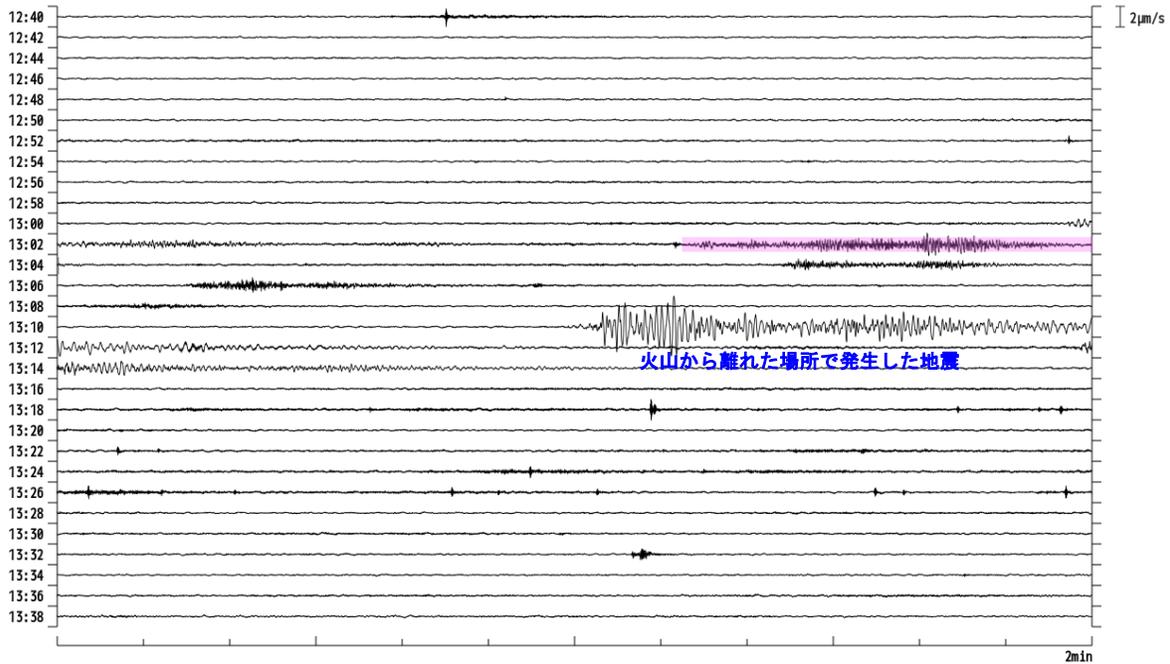


図5 雌阿寒岳 オンネトー南東観測点の速度波形 上下成分

（2月27日12時40分～13時40分）

波形中の桃色のハッチ（■）は火山性微動が継続した時間を示します。

- ・27日13時03分頃から振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が発生しました。この微動の前後で地震活動の状況には特段変化はなく、低調に推移しました。

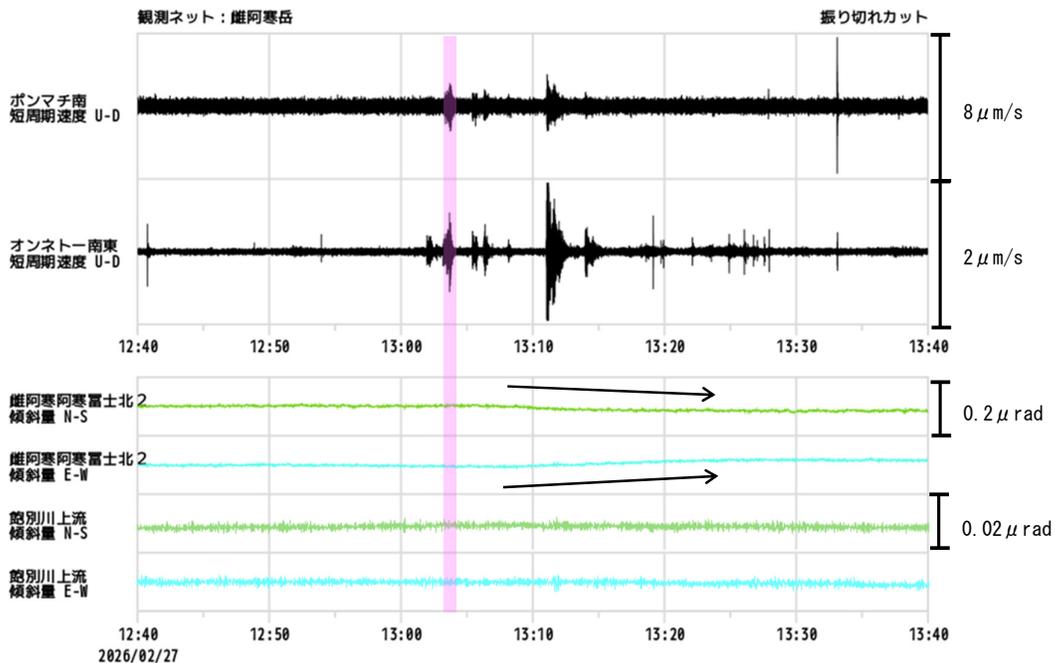


図6 雌阿寒岳 2月27日13時03分頃に発生した火山性微動とその後観測された傾斜変動

（2月27日12時40分～13時40分）

各地震波形は100Hzデータ、傾斜波形は1Hz（秒値）データの推移です。飽別川上流の傾斜計データはトレンド補正を行っています。

波形中の桃色のハッチ（■）は火山性微動が継続した時間を示します。

13時11分頃以降にみられる震動（振動）は、火山から離れた場所で発生した地震や観測点付近で発生したと考えられるノイズによるものです。

- ・27日13時03分頃の火山性微動の直後にボンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2傾斜計でごくわずかな傾斜変動（黒矢印）を観測しました。

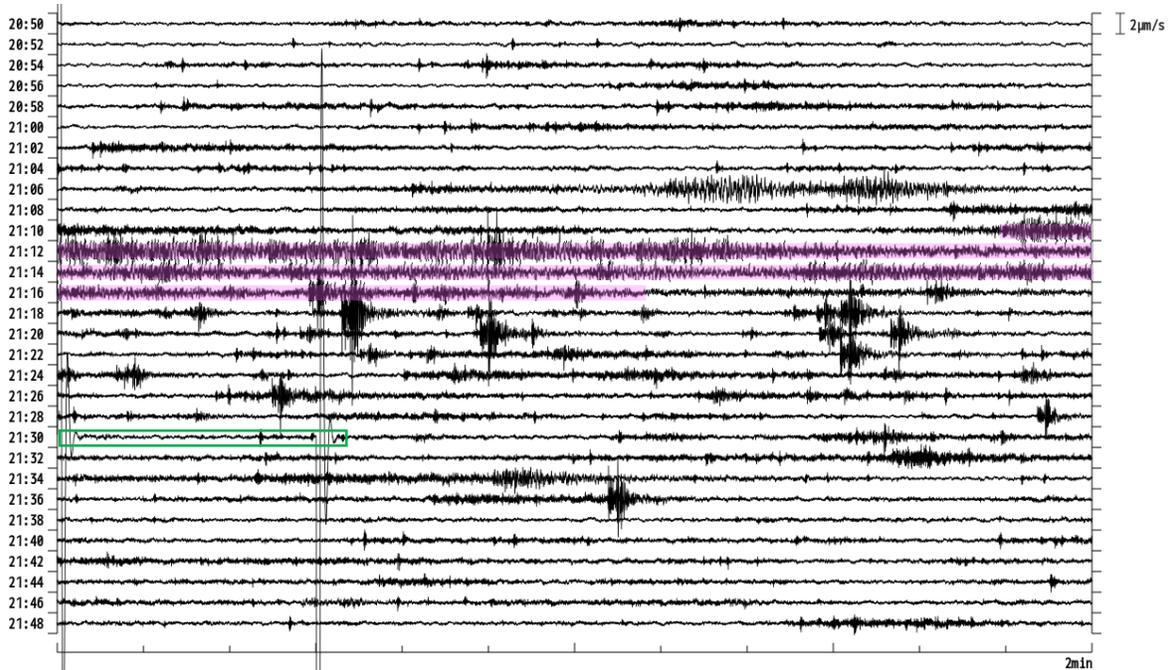


図7 雌阿寒岳 オンネトー南東観測点の速度波形 上下成分

（3月1日20時50分～21時50分）

波形中の桃色のハッチ（■）は火山性微動が継続した時間を示します。

波形中の緑四角（□）は検定信号です。

- ・ 3月1日21時11分頃から振幅が小さく継続時間が約5分の火山性微動が発生し、その後、ポンマチネシリ火口付近の地震が一時的にやや増加しました。

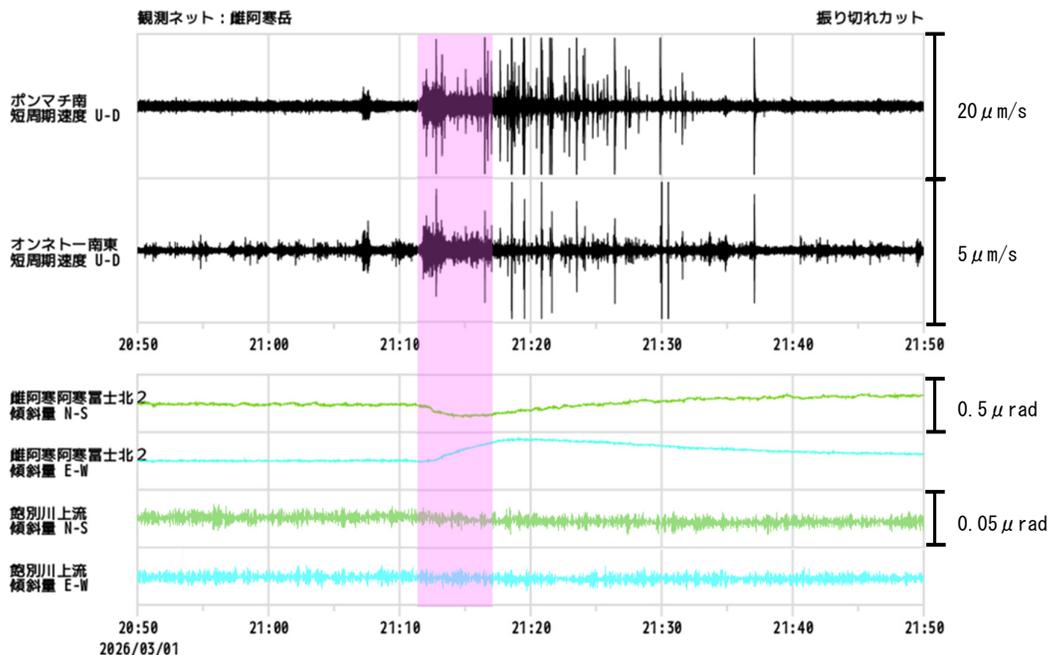


図8 雌阿寒岳 3月1日21時11分頃に発生した火山性微動と傾斜変動

（3月1日20時50分～21時50分）

各地震波形は100Hzデータ、傾斜波形は1Hz（秒値）データの推移です。鮎別川上流の傾斜計データはトレンド補正を行っています。

波形中の桃色のハッチ（■）は火山性微動が継続した時間を示します。

- ・ 3月1日21時11分頃からの火山性微動及び火山性地震の一時的なやや増加に伴い、ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2傾斜計ではわずかな傾斜変動を観測しました。

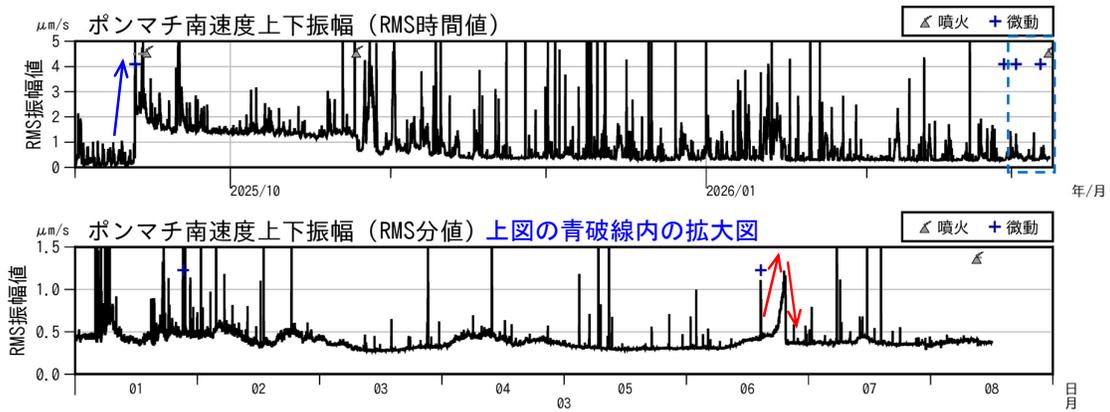


図9 雌阿寒岳 ポンマチ南地震計上下成分 RMS振幅の推移  
(2025年9月～2026年3月8日11時頃)

- ・RMS振幅レベルは火山活動だけでなく気象状況等の影響でも増減します。
- ・2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・2025年9月12日の火山性微動の発生後、ポンマチ南の地震計で振幅レベルが高まり（青矢印）、その後もそれ以前と比べてやや高い状態で推移しています。
- ・3月6日の夜に振幅レベルの小規模な増減（赤矢印）が認められました。

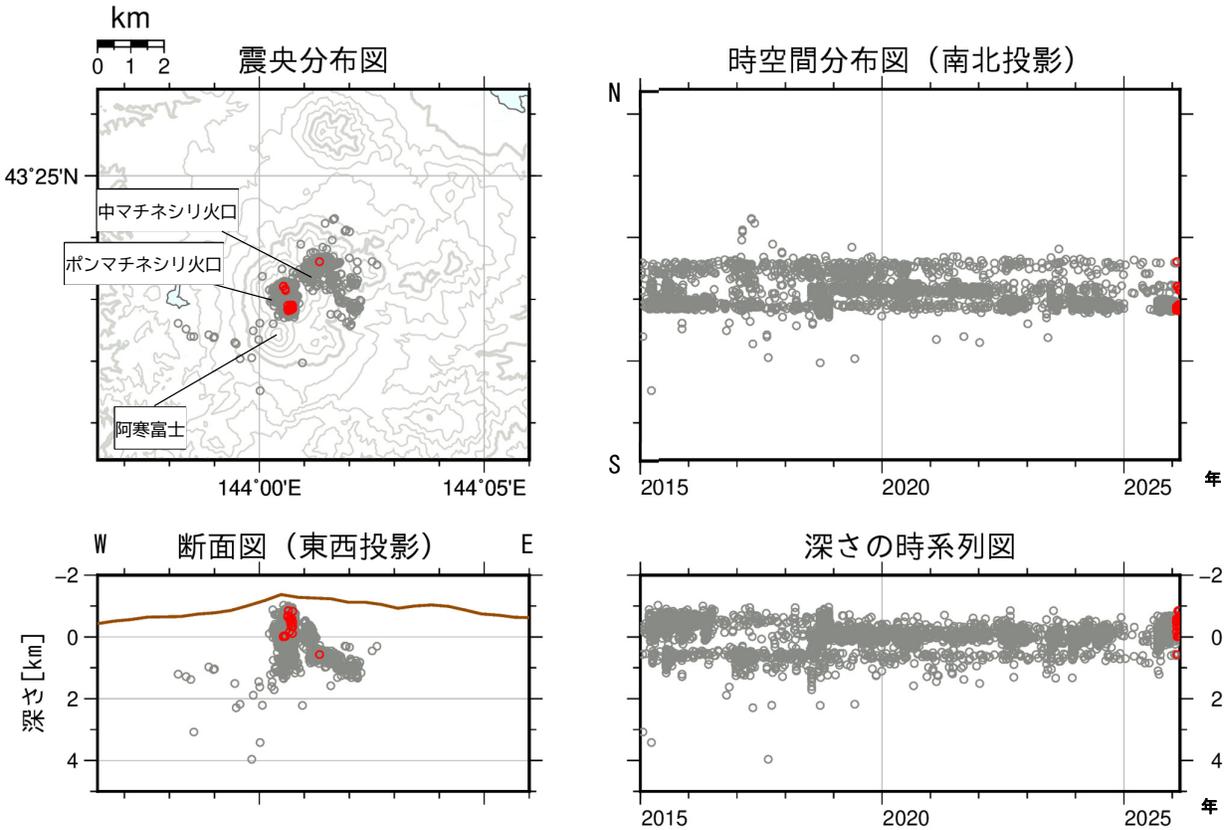


図10 雌阿寒岳 火山性地震の震源分布（2015年1月～2026年2月）  
○：2015年1月～2026年1月の震源 ○：2026年2月の震源

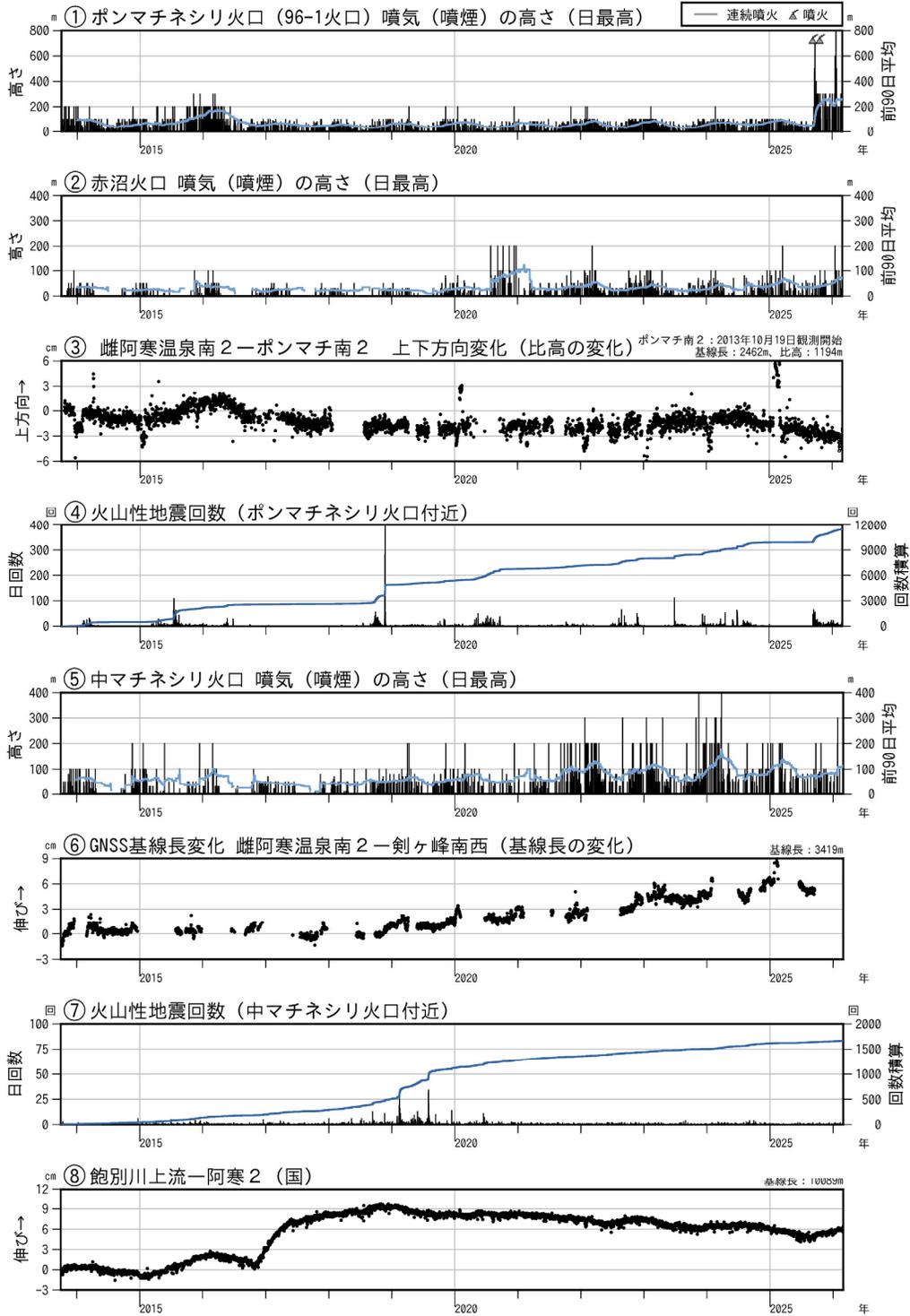


図11 雌阿寒岳 火口別の活動経過図（2013年10月～2026年 2月）

- ・各火口の位置は図 1 を参照してください。
- ・グラフ③、⑥、⑧は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図15）基線④、⑦、⑨に対応しています。
- ・グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。
- ・ポンマチネシリ火口付近の地震活動は、2025年9月の活発化前と比べてやや活発な状態です。また、96-1火口の噴煙の高さは、2025年9月12日以降、高い状態が続いています。
- ・中マチネシリ火口付近の活動状況を示唆する観測データに特段の変化は認められていません。

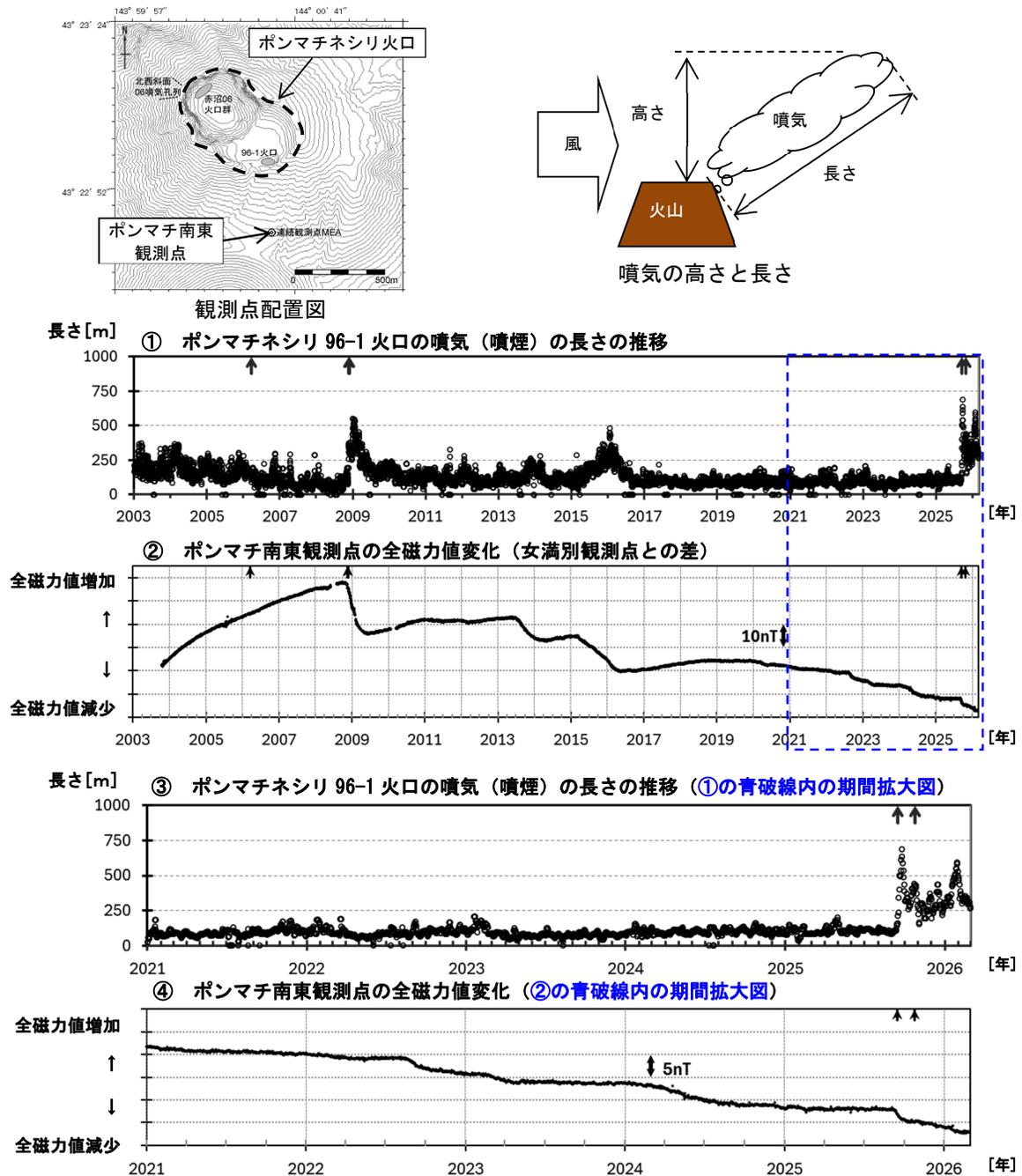


図12 雌阿寒岳 ポンマチネシリ96-1火口の噴気（噴煙）の長さや全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図（2003年～2026年2月）

- ・ ①③のグラフに示す噴気の高さは気温の影響を受けることから（気温が低いと噴気は長くなり、高いと短くなる傾向がある）、気温補正後の値をプロットしています。
- ・ ②④のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所女満別観測施設との全磁力値差をプロットしており（表示開始は2003年10月16日）、空白部分は欠測を示します。
- ・ 図中の↑は噴火を示します。ただし、2006年の噴火は赤沼火口からの噴火です。また、2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・ 96-1火口の噴煙の長さは、2025年9月12日以降増大し、活発な状態が続いています。
- ・ 96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、2025年9月12日以降、96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化を示すと考えられる全磁力値の減少がみられ、10月以降も緩やかな減少が続いています。また、中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

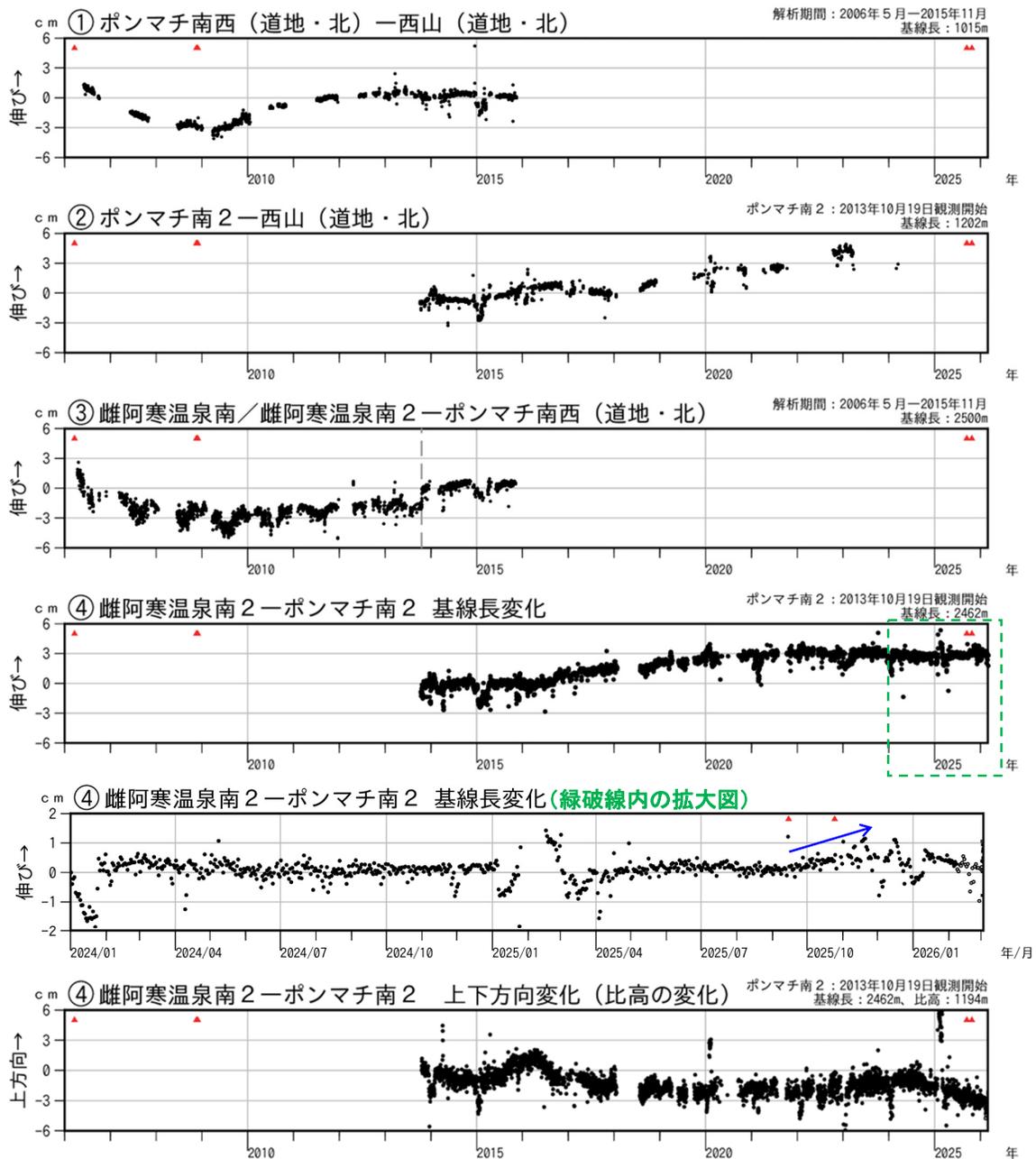


図13-1 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年4月～2026年2月）

- ・グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図15）の基線①～④に対応しています。
- ・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・基線③の点線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南2からみたポンマチ南2の上下方向の動きを表しています。
- ・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
- ・基線④（基線長）では、2025年9月中旬から11月頃にかけてごくわずかな伸長（青矢印）が認められましたが、1月以降はごくわずかな短縮が認められます。

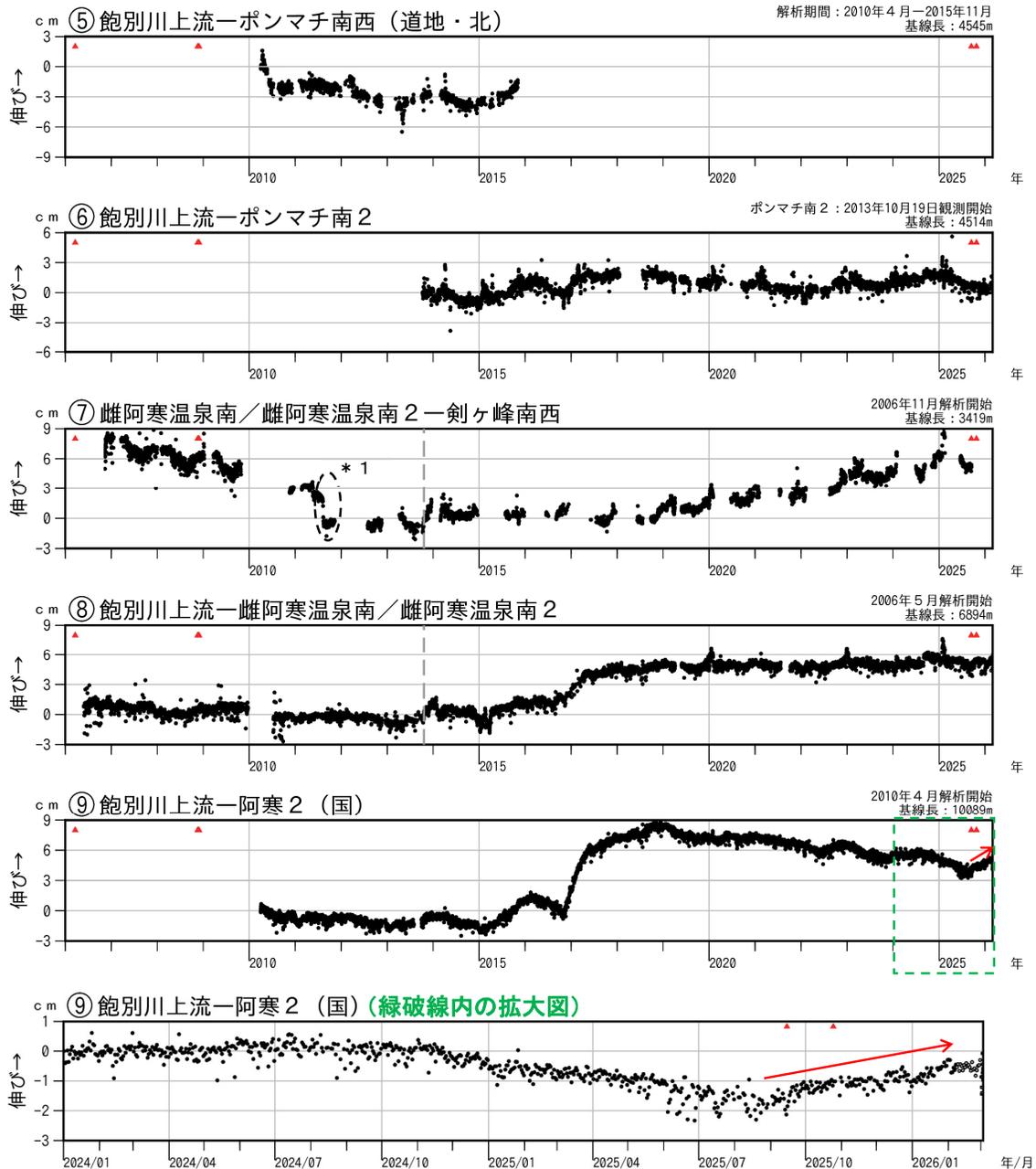


図13-2 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長の変化（2006年4月～2026年2月）

- ・グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図15）の基線⑤～⑨に対応しています。
- ・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・\* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
- ・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・基線⑦⑧の点線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近隣の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
- ・山麓の観測点を含む組み合わせの基線⑨では、2025年8月末以降、伸長傾向（赤矢印）が認められます。
- ・基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長傾向が認められます。

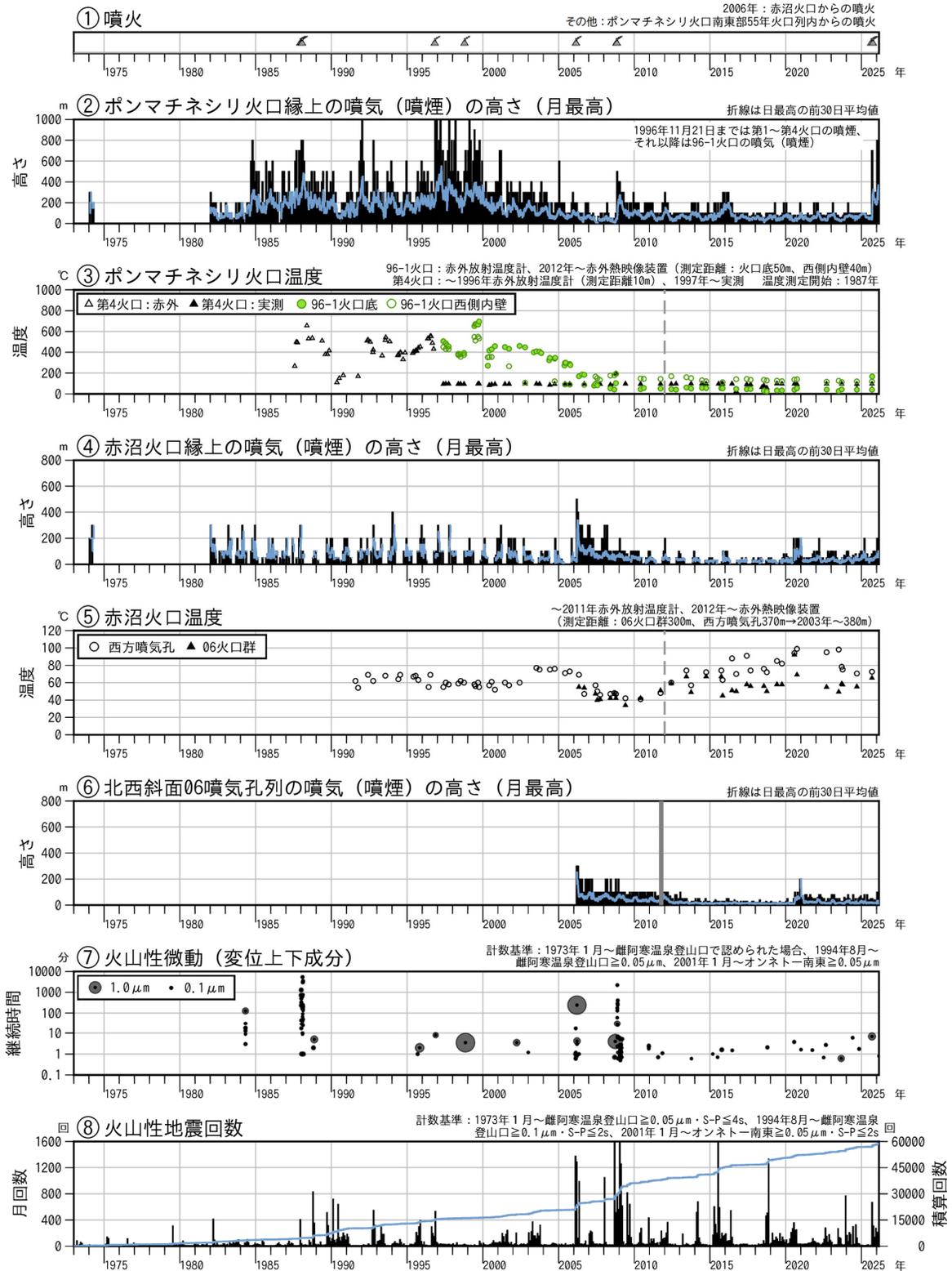


図14 雌阿寒岳 火山活動経過図（1973年1月～2026年2月）

- ・③：各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
- ・③⑤：測定機器の変更により、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
- ・⑥：灰色部分は機器障害による欠測を示します。
- ・各火口の位置は図1を参照してください。

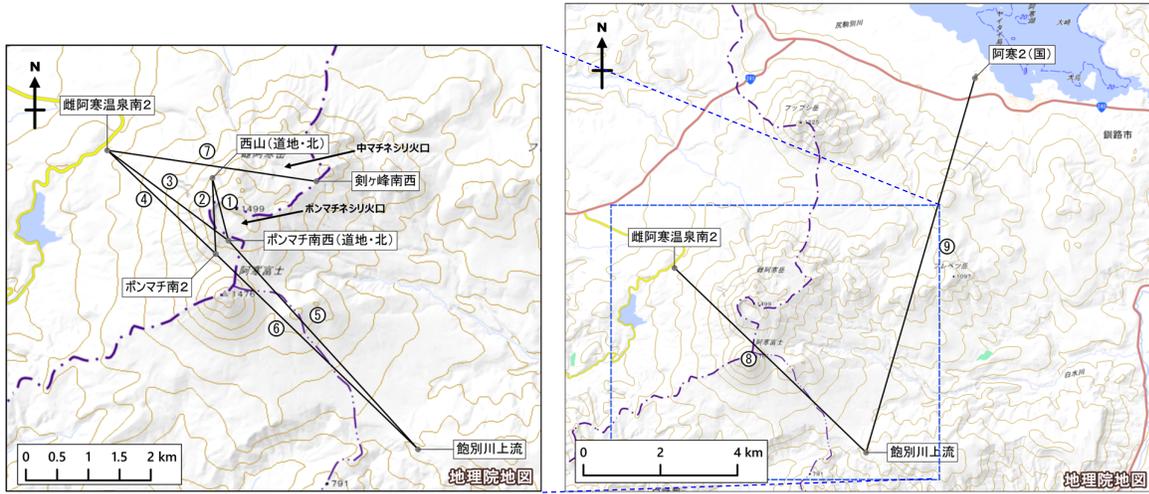


図15 雌阿寒岳 GNSS連続観測の基線図

- ・基線番号①～⑨は、図13のグラフ①～⑨に対応します。
- ・基線④、⑦、⑨は、それぞれ図11のグラフ③、⑥、⑧に対応しています。

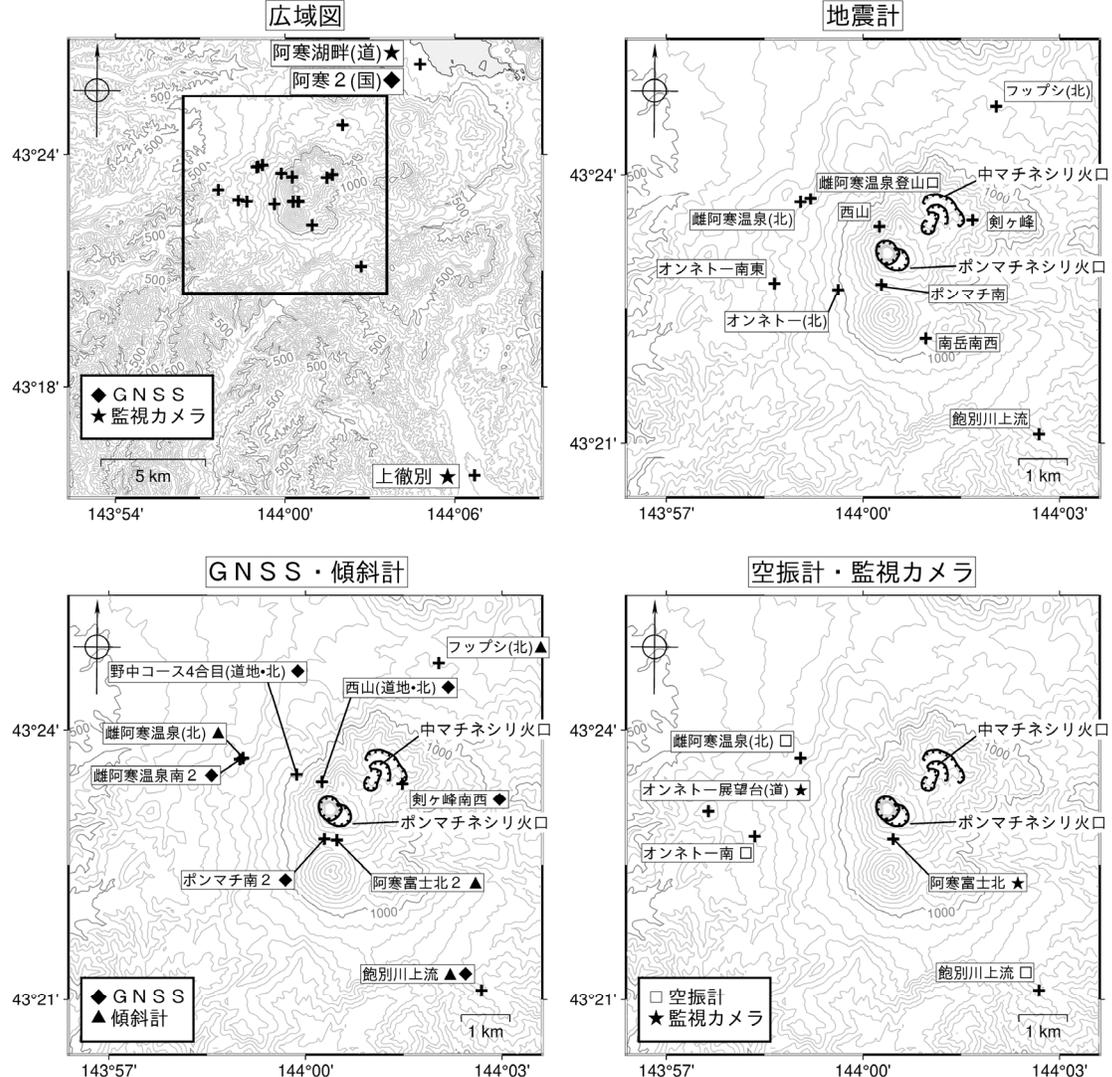


図16 雌阿寒岳 観測点配置図

各機器の配置図は広域図内太枠線で示した領域の拡大で、+印は観測点の位置を示します。  
 気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。  
 (国)：国土地理院 (北)：北海道大学 (道)：北海道  
 (道地)：北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所